

【書き下ろしコラム】
今週の
視点
論点
News, Trend Analysis and Opinion

以 前のコラムで小麦粉の価格高騰を取り上げた。新興国の需要増加、農業大国における不作、新型コロナウイルスに伴う物流の混乱、ロシアのウクライナ侵攻、為替変動などの複合的な要因により小麦の輸入価格が高騰し、それを踏まえて政府の売り渡し価格が大きく跳ね上がったものであった。

その後の状況を見ると、ウクライナ侵攻や新型コロナウイルス感染症が長期化しているのに加え、前回コラム掲載時点よりもさらに円安が進んで

おり、次の政府売り渡し価格の改定のタイミングである今秋に、もう一段階の価格高騰の波がやってくるリスクが高い。

このように輸入小麦の価格が短期的には落ち着く見込みが低い中、国産の小麦や米（米粉）への注目度が高まっている。小麦の自給率（カロリーベース、令和2年度）はわずか15%で大部分を輸入に頼っている状況にある。直近の輸入価格の高騰により国産小麦や国産米粉の相対的な優位性が高まっており、増産のチャンスとなっている。農林水産省では、輸入小麦等食品原材料価格高騰緊急対策を打ち出し、食品メーカーや外食店が国産の小麦粉・米粉へ切り替える際の費用を補助している。

ここで小麦の種類と用途について見てみよう。小麦粉はたんばく質の含有量で分類され、主にパン用の強力粉、中華麵用の準強力粉、うどん用（日本麵用）の中力粉、菓子用の薄力粉がある。農林水産省によると、用途別の割合はパン用が27%、麵用が32%、菓子用が5%、その他（みそ・焼酎・その他主食用等）が36%となっている。

小麦ショックを国産小麦・米粉の増産チャンスに



三輪 泰史

日本総合研究所 創発戦略センター
エキスパート

みわ・やすふみ

1979年生まれ、広島県福山市出身。東京大学大学院農学生命科学研究科農学国際専攻修了。2004年に日本総合研究所入社。18年7月から現職。農林水産省の食料・農業・農村政策審議会委員をはじめ、中央省庁などの有識者委員を多数歴任。専門は農業再生による地域活性化、先進農業技術の導入支援、農業ビジネスの海外展開支援など。18年6月から農林漁業成長産業化支援機構社外取締役。

増産の期待が高まる国産小麦だが、かつては品質が低いとも指摘されていた。近年は用途に合わせた品質の高い新品種が続々と登場しており、需要が拡大している。

うどんなどの日本麵用（中力粉）の品種の代表格が、香川県の「さぬきの夢2009」である。香川のソウルフードである讃岐うどんに使われており、地産地消によるブランド力の強化に貢献している。やはり地元材料を使ったご当地メニューは人気が高い。他にも北海道の「きたほなみ」、東海地方の「きぬあかり」や東北地方の「あおばの恋」などの品種が実用化されている。

パン・中華麵用（強力粉・準強力粉）の品種では、北海道の「ゆめちから」

や「春よ恋」、中四国地方などの「せときらら」、佐賀県の「さちかおり」などが挙げられる。特に北海道のゆめちからは大手製パンメーカーの商品で広く採用されており、スーパーマーケットやコンビニエンスストアで見かけることがある読者もおられるだろう。合わせて国産の米粉のマーケットも拡大している。日本の主食である米を製粉したものが、以前はあまりおいしくない商品も散見された。米粉に向かない主食用の米の余剰分を用いた商品が多かったことも一因と聞かれている。

しかし、米粉に適した新品種の開発、米粉の製粉技術の向上により、品質がかなり上がってきた。ノングルテンという付加価値もあり、パン、麺、

菓子などでの活用が増えている。パン用米粉としては、東北地方の「ゆめふわり」、西日本の「こなだもん」、九州地方の「ミズホチカラ」、そしてミズホチカラをさらに品種改良した「笑みたわわ」などが有名だ。麵用でも、北海道の「北瑞穂」、東北・北陸地方などの「越のかおり」、西日本の「ふくのこ」といった優れた品種が生み出されている。

ただし、コシヒカリをはじめとする主食用米は地域ごと、都道府県ごとに特徴に富んだものが存在するが、米粉用品種のラインアップは不十分である。地域の栽培環境と用途を踏まえた新品種の開発がさらに進めば、地域の新たな特産品やご当地メニューの創出にもつながると期待できる。

本欄は、多胡秀人氏（地域の魅力研究所代表理事）、渡邊准氏（地域経済活性化支援機構代表取締役専務）、井上久男氏（ジャーナリスト）、橋本卓典氏（共同通信社編集委員）、小林美希氏（ジャーナリスト）、三輪泰史氏（日本総合研究所創発戦略センター エクスパート）が交代で執筆します。

INFORMATION



「ウクライナ危機の現状」プーチン大統領の思惑

大和大学教授、ジャーナリスト 佐々木 正明氏

講師略歴 1971年、岩手県生まれ。大阪外大卒業後、産経新聞社入社。社会部、外信部を経てモスクワ支局長やリオデジャネイロ支局長、運動部次長、社会部次長を歴任。2021年春から大和大学教授。フリーランスでのジャーナリスト活動も続ける。ロシアによるウクライナ侵攻以降、テレビ出演が増え、情勢等を解説している。著書は「シー・シェパードの正体」「恐怖の環境テロリスト」など多数。

■石見政経懇話会 第277回定例会

日時 8月9日（火）正午～午後2時
会場 浜田ニューキャッスルホテル（浜田市殿町）

■石西政経懇話会 第238回定例会

日時 8月10日（水）正午～午後2時
会場 ホテルサンパレス益田（益田市高津町）

【会員制】入会などの問い合わせは、山陰中央新報政経懇話会事務局（電話0852・32・3477）またはHPをご覧ください。